論　文

神戸女子大学文学部紀要　55巻　1－15　2022

英語 there 構文の非対格性制約について *

本　田　隆　裕

On the Unaccusative Restriction in *There*-Constructions

Takahiro HONDA

1．はじめに

これまで英語の there 構文については様々な議論がなされてきたが、そのテーマの一つとして、there 構文に出現可能な動詞の種類はどのようなものかというものがある。

（1）a．　There appeared a ship on the horizon.
　　b．* There ran a little boy in the yard.　　（Levin 1993: 89-90）
　　c．* There ate a man a pudding.　　（Abe 2018: 84）

英語の動詞の中で、there 構文に出現可能な動詞は（1 a）のような非対格動詞に限定され（非対格性制約）、同じ自動詞であっても（1 b）のような非能格動詞や、（1 c）のような他動詞はこの構文には出現不可能であることが知られている。初期の生成文法では、文の主語が IP 指定部（あるいは TP 指定部）に直接基底生成されると考えられていて、その枠組みであれば、この現象については簡単に説明がついていた。つまり、（1 a）のような非対格動詞においては、外項（external argument）が現れておらず、内項（internal argument）である a ship のみが現れており、この内項が主語位置である TP 指定部に移動しない限り、TP 指定部が空席であるので、その位置に虚辞の there が挿入可能であるが、（1 b）のような非能格動詞や（1 c）のような他動詞は外項を持つため、それらの外項が TP 指定部を占めているため、there の挿入が不可能であると言える。しかし、現在の生成文法では、どのようなタイプの動詞であっても外項、内項がともに動詞句内に基底生成されて、TP 指定部に移動するという動詞句内主語仮説が採用されているため、（1）のように動詞のタイプによって there 構文に出現できるものとそうでないものがある理由については別の説明が必要となる。

さらに、（１ａ）と（１ｂ，ｃ）の違いとして、外項の有無があげられ、これが there 構文を許すかどうかを決定しているように思われるが、（２ｂ）に示すように、非対格動詞であっても there 構文に出現不可能なものがあるので、単に外項の有無だけでは there 構文に出現可能な動詞を説明するには不十分である。

（２）ａ． The boat sank.
　　ｂ．* There sank three ships last week. （Haegeman 1991: 334-335）

このようなデータの存在は、仮に動詞句内主語仮説を採用しなかったとしても解決できるものではないことから、there 構文に出現可能な動詞のタイプについては少なくとも動詞句内主語仮説とは無関係に議論されるべきであることがわかる。

ここまで、（１ａ）と（２）の動詞について特に区別なく非対格動詞と呼んできたが、厳密に言うと両者には違いがあることが知られている。（１ａ）の appear は対応する他動詞用法が存在しないのに対して、（２）の sink については、（３）のように他動詞用法も存在する。

（３） John sank the boat.

一般的には他動詞用法も存在する（２ａ）のような自動詞は非対格動詞と呼ばれることもあるが、厳密には能格動詞と呼ばれている。（１ａ）の動詞の呼称については統一的なものがないと思われるが、本論文では Deal（2009）にならって「純粋な非対格動詞」（pure unaccusative）と呼ぶことにするが、以下、特に断りがない場合、非対格動詞とはこの純粋な非対格動詞のみを指すこととし、能格動詞とは区別することにする。

以上の議論からすると、there 構文に出現可能な動詞は非対格動詞のみであり、その他の動詞である、能格動詞、非能格動詞、他動詞は there 構文に出現不可能であるという結論に到達しそうであるが、事実はそう単純ではない。

（４）ａ．* There died some people in that fire.
　　ｂ．* There vanished a book from this desk yesterday. （Milsark 1974: 252）

（４）の動詞である die や vanish は対応する他動詞用法がないため、非対格動詞に分類されると考えられるが there 構文には出現不可能である。本論文ではこれらの事実がどのようにして説明されるか議論するとともに、（４ａ）のような例であっても（５）のように進行形になった場合は容認される事実についても考察を述べる。

（５） There are some people dying in that fire.

以下、第 2 節では there 構文に出現可能な動詞のタイプについて詳細に研究した Deal（2009）の分析を概観した上で、Deal の分析では説明できない例を指摘する。第 3 節では、藤田・松本（2005）の 3 層分裂動詞句による能格動詞の分析を応用することで、Deal の分析の問題点が解決できることを示す。第 4 節では、純粋な非対格動詞でありながら there 構文に出現不可能な動詞について、藤田・松本の分析を発展させた 4 層分裂動詞句を提案することにより説明を試みる。第 5 節は結論と今後の課題である。

2．Deal（2009）の分析

Deal は、（一部の）能格動詞のことを起動相（inchoative）動詞と呼んでおり、純粋な非対格動詞と区別し、純粋な非対格動詞のみが there 構文に出現可能であり、起動相動詞は there 構文に出現不可能であると分析している。例えば、fall は起動相動詞と考えられるが、対応する他動詞用法がないにもかかわらず、there 構文に出現できない。一方、hang は対応する他動詞用法があり使役交替を示すが、there 構文に出現可能である。Deal によれば、自動詞用法の hang は純粋な非対格動詞に該当する。なお、grow に関しては、（6）のように純粋な非対格動詞としての用法も、起動相動詞としての用法も、さらに他動詞としての用法も存在する（Deal 2009: 297）。

（6）a．純粋な非対格動詞の場合：[v~ [√GROW DP]]
　　b．起動相動詞の場合：　　[CAUSE [√GROW DP]]
　　c．他動詞の場合：　　[DP [Voice [CAUSE [√GROW DP]]]]

（6）に見られる、「√」は、語根（root）を意味しており、内項を選択する主要部である。近年の生成文法では、動詞はレキシコンの中に動詞という範疇情報を持った単語として存在するのではなく、範疇中立的な状態で存在しており、それが統語構造において、併合（Merge）する要素を動詞化するような主要部に選択された場合に動詞として最終的に出力されると考えられている。例えば、（ここでは grow の名詞化に関する詳細な議論は省略するとして、）√GROW が併合する要素を名詞化する主要部に選択された場合は growth として最終的に出力される。（6 a）における v~ は、純粋に語根を動詞化するだけの主要部である。このように動詞化する主要部は一般的には軽動詞（light verb）と呼ばれる。一方、（6 b，c）に見られる CAUSE も軽動詞の一つと考えられるが、この軽動詞は語根を動詞化するのに加えて使役事象（causing event）を導入する主要部である。（6 c）に見られる Voice は外項を導入する主要部である。

このような提案は、Milsark（1974: 250）で指摘されている以下のような例の説明を可能にする。

（7）a．　There grew some corn in our garden last year.　　（stative; ✔*there*）
　　b．* There grew some corn very slowly in Massachusetts.　　（eventive; **there*）
　　（Deal 2009: 296）

（7）に示すように、grow は状態動詞としての解釈も事象動詞としての解釈も存在し得るが、there 構文に出現可能なのは状態動詞として現れた場合のみである。Deal によれば、CAUSE が状態変化の意味をもたらし、事象動詞として解釈されることになるため、（7 a）の grow は（6 a）に該当し、（7 b）は（6 b）に該当する。では、なぜ CAUSE を含むと there 構文に出現できないのかということであるが、Deal によれば CAUSE は使役事象を項として要求するため、（発音されないが）指定部に使役事象が併合される。これに対して、（6 a）の $v_{\sim}$ は指定部に何も要求しないので、$v_{\sim}$ の指定部が空席になっている。Deal はこの $v_{\sim}$ の指定部に虚辞 there を併合することはできるが、CAUSE を含む動詞句は there を併合する位置がないため、純粋な非対格動詞のみ there 構文に出現可能であると説明している。

さらに、Deal は（8）のような現象についても説明している。

（8） a．* There laughed a child in the hallway.
　　 b．　There is a child laughing in the hallway.　　（Deal 2009: 301）

前節でも言及したように、laugh のような非能格動詞は there 構文に出現不可能である。非能格動詞の唯一の項は外項であり、これは Voice の指定部に併合されるため、there を併合する位置が空いていないからである。ただし、（8 b）のように進行形の文は文法的になる。Deal によれば、（8 b）は以下のような構造から派生されている。

（9）$[_{vP}$ there$[\ v_{\sim}[_{AspP}\ Asp_{prog}\ [_{vP}\ [_{DP}$ a child$]\ [$Voice $\sqrt{\text{LAUGH}}]]]]]$

Deal は、コピュラ（copula）が純粋な非対格動詞に現れる $v_{\sim}$ に該当すると提案しており、これにより（8 b）の文法性を説明している。

ここまでの議論のみを踏まえると、事実に反して（10）のように there が複数出現できることを予測してしまうように思われる。

（10）*There is there arriving a train in the station.　　（Deal 2009: 303）

Deal によれば、（10）については概略（11）のような構造が考えられる。

（11）$[_{vP}$ there$_2$《$_{PHASE2}$ $[\ v_{\sim}[_{AspP}\ ASP_{prog}\ [_{vP}$ there$_1$《$_{PHASE1}$ $[\ v_{\sim}[_{\sqrt{}P}\ [_{\sqrt{}P}\ \sqrt{\text{ARRIVE}}\ [_{DP}$ a train$]]$ $[_{PP}$ in the station$]]]$》$]]]$》$]$

（11）の《PHASE1》,《PHASE2》は、フェイズの境界線（phase boundary; Chomsky 2000，2001）を表している。また、Deal（2009: 304）は以下のような提案をしている。

（12）*There* has uninterpretable features that it checks against its associate. This is implemented as a local Agree relationship.

Deal の仮説では、虚辞 there は意味上の主語である連結詞（associate）と一致関係を結ばなければならないが、この一致関係はフェイズの境界線を越えることができないため、（11）において、$there_1$の方は PHASE1の中にある連結詞 a train と一致関係を結ぶことができるが、$there_2$の方は一致関係を結ぶことができない。したがって、（10）のように複数の there が併合されることはあり得ても、連結詞と一致できない there に解釈不可能な素性が残るため、（10）のような例は非文法的となる。また、（８ｂ）の構造を表した（９）にフェイズの境界線を示すとすれば、（13）のようになると考えられる。

（13）$[_{vP}$ there《$_{PHASE2}$ [$v_{\sim}[_{AspP}$ Asp_{prog} $[_{vP}$ $[_{DP}$ a child］《$_{PHASE1}$ [Voice $\sqrt{LAUGH}$]》]]]》]

（13）において、there の連結詞である a child は PHASE1ではなく、PHASE2内にあるため、there と一致関係を結ぶことができる。

このように、Deal の分析では、there が導入可能な位置（すなわち、$v_{\sim}$ の指定部）が存在していることと、there が連結詞と一致関係を結べることが、there 構文の文法性を決める要因であると考えられている。

ここで、Deal の分析について２つの疑問が生じる。まず、Deal は動詞 fall を起動相動詞として分類しており、その構造を（14）のように記載している。

（14）*fall* [CAUSE [$\sqrt{FALL}$ DP]]　　（Deal 2009: 297）

これを踏まえ、英語母語話者に（15）の容認性を確認したところ、容認不可能であるという判断であった。

（15）*There fell a leaf from the tree.

ここまでは Deal の分析と合致しているが、同じ英語母語話者に（16）の容認性を確認したところ、容認できると判断しており、また（16）は（17ａ，ｂ）両方の解釈が可能であるという回答であった。

（16）　There is a leaf falling from the tree.

（17）ａ．A leaf is falling from the tree.

　　ｂ．There is a leaf which is falling from the tree.

（17ａ）の解釈が可能であるということから、（16）は Deal の分析に基づけば、（18）のような構造

になっていると考えられる。[1)]

（18）[$_{vP}$ there《$_{PHASE2}$ [v$_{\sim}$ [$_{AspP}$ Asp$_{prog}$ [$_{vP}$《$_{PHASE1}$ [CAUSE [$_{\sqrt{}P}$ [$_{\sqrt{}P}$ $\sqrt{}$FALL [$_{DP}$ a leaf]] [$_{PP}$ from the tree]]]》]]]》]]

Deal の分析によれば、全ての動詞句はフェイズであると考えられるため、フェイズの境界線は（18）のようになっていると考えられる。さらに、虚辞 there は v$_{\sim}$ の指定部にしか併合されないとすれば、（18）の there は連結詞である a leaf と一致関係を結べないはずであり、（16）が容認可能な理由が不明である。[2)]

なお、純粋な非対格動詞でありながら（４ｂ）に示したように、there 構文に出現不可能な動詞 vanish についても、英語母語話者によれば（19）の文であれば、（20 a , b）両方の解釈が可能である容認可能な文である。

（19） There is a book vanishing from this desk every day.

（20） a． A book is vanishing from this desk every day.

b． There is a book vanishing from this desk every day.

Deal によれば、there 構文に出現不可能な動詞の軽動詞は v$_{\sim}$ ではないことになるので、CAUSE となっていると考えられるが、それであれば（19）の構造は（18）と同じ構造となるはずであり、（16）と同様になぜ（４ｂ）は容認不可能である一方で（19）は容認可能となるのか不明である。

２つ目に、Deal は（21）のような例を挙げながら、この文が非文法的である理由について詳しく説明していない。

（21）*There is likely a train to arrive in the station. （Deal 2009: 308）

Deal（2009: 309）はこの例について、（21）のような不定詞 TP の指定部を指し、“Perhaps this position is not one in which nominals can be semantically interpreted.” と述べ、（21）が容認されない理由については Postal（1974, 1993）の指摘に基づいた（22）の例が容認されないのと同様であるという趣旨の説明をしているだけで、なぜこの不定詞 TP の指定部の位置が問題なのかということは明らかにしていない。

（22） a． Stolen documents were alleged to be in the drawer. ✔ Passive of ECM

b． * John alleged stolen documents to be in the drawer. *Active ECM of NP

c． John alleged there to be stolen documents in the drawer. ✔ ECM of Expletive.

したがって、there 構文に出現可能な動詞についてはさらなる検討が必要と言える。

3．能格動詞・起動相動詞の再考

ある動詞が there 構文に出現可能かどうかは、その動詞が純粋な非対格動詞であるかどうかにかかっているという Deal（2009）の分析そのものは妥当であると考えられる。先に指摘した問題点についても説明できるよう、ここでは純粋な非対格動詞の判定について別の角度から捉え直してみたい。
Fujita（1994）、藤田・松本（2005）は、（23）のような他動詞文は、概略、（24）のような構造から派生されると提案している。

（23） Mary broke the vase.
（24）[$_{v1P}$ Agent [v1 [$_{v2P}$ Causer [v2 [$_{VP}$ V Theme]]]]]

（23）において、内項に該当する the vase は主題（Theme）として解釈されるが、外項である Mary は意図的に break という行為をした動作主（Agent）としての解釈も、意図的ではないが break という出来事を引き起こした原因（Causer）となっている解釈も可能である。Deal の分析でも触れたが、近年の生成文法では動詞は語根（（24）では V が該当する）と軽動詞から成る、謂わば、2 層構造となっていると考えられているが、藤田・松本は（23）のような他動詞文は（24）のような 3 層構造になっていると提案している。（23）において、Mary が Causer として解釈される場合は、Causer の役割を与える v2の項として Mary が現れ、Agent の役割を与える v1が構造上含まれていない。一方、Mary が Agent として解釈される場合は、Mary は先に Causer として v2と併合され、その後、さらに v1の指定部に移動して Agent の役割も受けとると考えられている。[3)]

藤田・松本は、能格動詞について複数の派生の可能性を述べているが、その一つとして、（25）のような構造を提案している。

（25）[$_{v2P}$ Causer [v2 [$_{VP}$ V Theme]]]

能格動詞の場合は内項のみが現れるのであるが、その内項がまず Theme として V と併合され、その後、v2の指定部に移動して Causer の役割も受けとると考えられる。これは、能格動詞が（26）のように all by itself という表現と共起可能であることから、能格動詞の主語は Theme であると同時に Causer にもなり得るという事実と合致する。

（26）The boat sank all by itself. （Keyser and Roeper 1984: 405）

ここでの能格動詞は起動相動詞に該当するが、Deal（2009）の提案する CAUSE という軽動詞は藤田・松本（2005）の v2に該当すると考えられる。両者の違いとしては、CAUSE は項として使役事象を取

るのに対し、v2は内項（つまり、Theme）を取るという点である。また、藤田・松本（2005）では明確に示されていないが、純粋な非対格動詞の場合、v2ではなく、Deal が提案した $v_{\sim}$ のような軽動詞が現れており、そのため Causer が純粋な非対格動詞では含意されないと説明できると考えられる。

Honda（2020）は、藤田・松本（2005）の分析に加え、（27）のような構造を英語の名詞表現の構造として提案している。[4)]

（27）$[_{\alpha}$ D1$_{[Case:u]/[Person:u]}$ $[_{D2P}$ D2$_{[Number:u]}$ NP$_{[iPerson]/[iNumber]}]]$

一般的に名詞表現は DP であると分析され、限定詞Dが名詞句 NP を補部に取る構造が考えられている。それに対し、（27）の構造では限定詞を D1と D2の 2 つに分離し、それぞれに異なる素性を仮定している。ここでは、議論の詳細に触れないが、Honda の分析では、Sabel（2000）などの分析と同様に虚辞 there を独立した語彙項目とは考えず、（27）の名詞表現の一部である D1のみが（27）から抜き出されて TP 指定部へ移動することで、D1が最終的に there として具現されると提案している。なお、D2P が there 構文における連結詞に該当する。

（25）の起動相動詞の構造と（27）の名詞表現の構造に基づけば、（28ｂ）（＝（2b））の派生は凡そ（29）のようになっていると考えられる。

（28）ａ．　The boat sank.

　　ｂ．* There sank three ships last week.　　（＝（2））

（29）　$[_{TP}$ D1$_i$ $[$T $[_{v2P}$ t_i $[$v2 $[_{VP}$ $\sqrt{}$SINK $[t_i$ $[_{D2P}$ three ships$]]]]]]]$

この派生では、具体的な意味解釈を持たない D1が v2の項として併合されて Causer の解釈を受けることになるため、（28b）のような文は容認されない。一方、（28a）の派生は（30）のようになっていると考えられる。

（30）$[_{TP}$ $[$D1 $[_{D2P}$ three ships$]]_i$ $[$T $[_{v2P}$ t_i $[$v2 $[_{VP}$ $\sqrt{}$SINK $t_i]]]]]$

（30）の派生では、D1を含む名詞表現全体が v2の指定部に併合されて Causer の解釈を受けており、何ら問題がない。また、D1は D2P と分離されていないため D1は虚辞 there として現れない。

なお、（31）のような非能格動詞が there 構文に現れない理由であるが、虚辞 there が出現する場合は、（32）のような派生が考えられるためである。

（31）ａ．* There ran a little boy in the yard.　　（＝（1b））

　　ｂ．* There a little boy ran in the yard.

（32）　$[_{TP}$ D1$_i$ $[$T $[_{?P}$ $[t_i$ $[_{D2P}$ a little boy$]]$ $[$v1/v2 $[_{VP}$ $\sqrt{}$RUN$]]]]]$

（31 a ）については、英語の動詞は時制Ｔの位置に移動しないので、ran が外項に先行することはないため、そもそもそのような文は派生不可能である。また、（31 b ）については、非能格動詞の外項が Agent であるか Causer であるかについてはここでは議論しないが、いずれであっても v1または v2の指定部に D1以外の名詞表現（つまり、連結詞である D2P）が留まることになる。ここで問題となるのは、（32）で ?P と表示された部分であり、（33）に示した集合になっている。（ここでは、議論をわかりやすくするため、外項が Agent になっているものとして記載している。）

（33）{D2P, v1P}

（33）のような構造は、Chomsky（2013）が指摘する｛XP, YP｝という句同士の集合である。Chomsky によれば、｛H, XP｝のような主要部Ｈと句 XP からなる集合のラベルはＨとなるが、｛XP, YP｝の場合はその集合のラベルが決定できず解釈不可能になると言われている。ただし、｛XP, YP｝のような集合であっても、いずれかの句が移動すれば、残った方の句がラベルになり、また 2 つの句に共有される素性（ϕ素性など）があれば、その素性が全体のラベルになり、解釈可能になると言われている。ところが、（33）においてはいずれの句も移動しておらず、連結詞の D2P と v1P には共有される素性が存在しない。Agent などのθ役割も素性の一つ（θ素性）とする Hornstein（1999）の分析においても、θ素性を担うのは動詞などの述語だけであり、項である名詞表現はそのような素性を持たないと考えられている。

ここで、先にあげた（34）（＝（16））、（35）（＝（19））、（36）（＝（21））がどのように説明できるか見てみよう。

（34）　There is a leaf falling from the tree.　（＝（16））
（35）　There is a book vanishing from this desk every day.　（＝（19））
（36）＊There is likely a train to arrive in the station.　（＝（21））

議論に直接関係ない部分は省略してあるが、（34）の派生は（37）、（35）の派生は（38）、（36）の派生は（39）のようになっていると考えられる。

（37）$[_{TP}$ D1$_j$ $[_T$ $[_{AspP}$ $[t_j$ $[_{D2P}$ a leaf$]]_i$ $[Asp_{prog}$ $[_{v2P}$ t_i $[_{v2}$ $[_{VP}$ $\sqrt{FALL}$ $t_i]]]]]]]$
（38）$[_{TP}$ D1$_j$ $[_T$ $[_{AspP}$ $[t_j$ $[_{D2P}$ a book$]]_i$ $[Asp_{prog}$ $[_{v\text{-}P}$ $[v_{\sim}$ $[_{VP}$ $\sqrt{VANISH}$ $t_i]]]]]]]$
（39）$[_{TP}$ D1$_j$ $[_T$ ... $[_{AP}$ likely $[_{?P}$ $[t_j$ $[_{D2P}$ a train$]]_i$ $[$to $[_{v\text{-}P}$ $v_{\sim}$ $[_{VP}$ $\sqrt{ARRIVE}$ $t_i]]]]]]]$

Deal（2009）では、fall は起動相動詞に分類されていたが、これが藤田・松本（2005）における能格動詞に該当するかは確認しておく必要がある。影山（1996）は、（40 a ）のように非対格動詞は itself のような再帰目的語を排除するが、（40 b ）のように、能格動詞は再帰代名詞構文を許すと述べている。

（40） a．* A traffic accident happened itself at the corner. （影山 1996: 149）
b． The fire rapidly spread (itself) through the building. （Cruse 1973: 21）

また、影山は（41 a ）のように all by itself という表現が、非対格動詞とは矛盾するが、（41 b ）（＝（26））のように能格動詞とは共起すると指摘している。

（41） a．* The accident happened all by itself. （影山 1996: 151）
b． The boat sank all by itself. （＝（26））

BNC（British National Corpus）を調べたところ、（42 a ）のように再帰代名詞構文と思われる fall の使用例が1件だけであるが見つかり、また（42 b ）のように all by itself と fall が共起している例も少数ながら見つかった。

（42） a．They also often fall themselves, or the lift rope breaks. （BNC）
b．It fell all by itself.（*Fountain of Death: A Gregor Demarkian Holiday Mystery*, by Jane Haddam）

これらの例を踏まえ、fall については能格動詞に該当すると仮定すれば、（34）は（37）のように派生される。（37）においては、連結詞の a leaf は v2の指定部を経由しているが、最終的に Asp_{prog} の指定部に移動している。先に、v1や v2と連結詞の間には共有される素性がなく、これが（31 b ）のような文が非文法的な理由であると述べた。そこで、Asp_{prog} と連結詞の間には共有される素性が存在するか検討したい。併合そのものは自由に生じると考えた場合、（43 a , b ）の両者の間に文法的な違いはないと思われるが、実際には（43 a ）のみが可能な語順である。

（43） a． There is a train arriving.
b．* There is arriving a train. （Sobin 2014: 386）

このことから、連結詞 a train の Asp_{prog} の指定部への移動は義務的であると考えられ、連結詞と Asp_{prog} の間に何らかの素性照合が関係し、その素性が両者に共有されているものと思われる。[5)]

上記の分析は、（35）, （38）にも当てはまると言える。ただし、vanish が純粋な非対格動詞であるかについては後で検討する。

さらに、（36）の例であるが、（39）に示したように、不定詞 to は T の一種であると考えられるが、不定詞であることからも名詞とは一致を示さないものと考えられる。したがって、（39）において ?P と示した集合は連結詞と to を主要部とする TP から成るが、両者に共有される素性がないため非文法的となっていると考えられる。なお、連結詞が不定詞 TP の指定部へ移動していない（44）のような

例は文法的である。

（44）There is likely to arrive a man.　（Chomsky 2001: 16）

以上のように、藤田・松本（2005）の能格動詞の派生に基づけば、Deal（2009）が十分説明できなかった例が説明可能となる。

４．非対格動詞の再考

最後に、（45）（＝（4））のように純粋な非対格動詞であるにもかかわらず、there 構文に出現不可能な動詞について考察を述べたい。

（45）a．* There died some people in that fire.
　　b．* There vanished a book from this desk yesterday.　（＝（4））

これらの動詞が（46）のような進行形の文では出現可能である事実は、先に見た（37）,（38）の構造から明らかである。

（46）a．There are some people dying in that fire.　（＝（5））
　　b．There is a book vanishing from the desk every day.

問題は（45）のような進行形ではない there 構文の場合である。

本論文では、一旦、die や vanish のような動詞も藤田・松本（2005）における能格動詞と同じ（47）（＝（25））のような構造を持つと提案する。

（47）[$_{v2P}$ Causer [v2 [$_{VP}$ V Theme]]]　（＝（25））

影山（1996）では、open のような動詞は（48 a）のような概念構造を持つが、自動詞用法の場合は（48 b）のように使役主（x＝y）が変化対象（y）と同定され、意味的に束縛される反使役化（anti-causativization）が起こっていると提案している。

（48）a．[x CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]
　　b．[x=y CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]

影山（1996: 145）は、「束縛を受けた使役主は対象物と同一物であることが意味構造で保証されるから、統語構造には現れない。」と説明している。

また、影山はappearのように出現・発生を表す非対格動詞は（49ａ）のような概念構造を持つが、金水（1994）の分析に基づき、vanishのような状態変化動詞は（49ｂ）のような概念構造になっていると提案している。

（49）ａ．［BECOME［y BE AT-z］］
　　ｂ．［y BECOME［y BE At-z］］

出現・発生を表す動詞は、“*appear away”のようにawayと共起できない。一方、状態変化動詞は、“vanish away”のようにawayと共起できる。これは状態変化動詞には初期状態から変化後の状態への推移があるが、出現・発生を表す動詞には初期状態（BECOMEのｙ）がないためである。

そこで、本論文では、藤田・松本（2005）が提案した（24）の3層分裂動詞句を発展させ、（50）のような4層分裂動詞句を提案する。[6)]

（50）［$_{v1P}$ Agent［v1［$_{v2P}$ Causer［v2［$_{v3P}$ Affectum［v3［$_{VP}$ V Theme］］］］］］］

ここでは、概略、v2が影山（1996）のCONTROLに、v3がBECOMEに相当すると仮定しておく。ただし、（49ａ）の概念構造を持つ純粋な非対格動詞は（51ａ）のような構造を持ち、（49ｂ）の概念構造を持つ状態変化動詞は（51ｂ）のような構造になっていると提案する。

（51）ａ．［$_{v\sim P}$ v$_{\sim}$［$_{VP}$ V Theme］］］
　　ｂ．［$_{v3P}$ Affectum［v3［$_{VP}$ V Theme］］］

（51ｂ）はdieやvanishなどの動詞に相当するが、これらの動詞では内項がThemeとして併合された後、v3の指定部に移動してAffectumの役割を受け取る。このv3の指定部から名詞表現全てがTP指定部へ移動すれば問題なく文が派生されるが、虚辞thereを生じさせるためには、v3指定部に連結詞のみを残し、そこからD1だけがTP指定部へ移動する必要があるが、（32）の構造で見たのと同じく、v3と連結詞に共有される素性がないため、ラベル付けが適切に行われず、（45）は非文法的となっている。

一方、（51ａ）では、軽動詞によって新たな項が要求されず、このような軽動詞は先に見たDeal（2009）のv$_{\sim}$に該当する。つまり、項を要求するBECOMEはv3に該当し、項を要求しないBECOMEはv$_{\sim}$に該当すると言える。

なお、there構文を許さないdisappearという動詞はvanishと類似した意味を持つが、影山（1996: 108）が指摘するように、“a vanished civilization”とは言えても“*a disappeared civilization”とは言えないことや、“*disappear away”のようにawayと共起不可能であるなどの違いが見られる。また、Dealが指摘するように、disappearについてはappearと形態的に類似しているが、disappearに

ついては（52 a ）のように他動詞としての用法も可能であるということが指摘されている。[7)]

（52） a．? The magician disappeared a rabbit.
b．* The magician appeared a rabbit. （Deal 2009: 298）

このことから、disappear については能格動詞に該当し、それが there 構文への出現を不可能にしているのではないかと考えられるが、この点については今後の検討課題としたい。

5．結論と今後の課題

本論文では、there 構文に出現不可能な動詞はどのようなものであるか検討した。その際、藤田・松本（2005）で提案されている 3 層分裂動詞句に基づいた 4 層分裂動詞句を仮定することで、Deal（2009）の分析の問題点が解決でき、さらに die や vanish のように純粋な非対格動詞と思われる動詞が there 構文に出現不可能である理由を説明できることを示した。なお、今回の調査では都合により、1 名しかインフォーマント調査を依頼できなかったので、今後、本論文で取り上げた例についてあらためて複数の母語話者に容認性の判定を依頼したい。

［注］

＊本研究は、JSPS 科研費20K13068の助成を受けている。本論文の執筆にあたり貴重な意見をいただいた査読者及びインフォーマント調査に協力いただいた英語母語話者 1 名に感謝申し上げたい。

1 ）査読者から質問があったが、（16）が（17 b ）の解釈を持つ場合は（18）とは別の構造になっているものと考えられる。（16）については、一般的には現在分詞の後置修飾として知られている（17 b ）の解釈も可能であるが、本論文の議論に関して重要であるのは（17 a ）の解釈を持つ場合のみであるため、（17 b ）の解釈については取り上げない。両者の判別方法については Deal（2009: fn.28）を参照されたい。

2 ）最近の生成文法理論（Chomsky 2015）では、併合そのものは自由に適用可能であるので、なぜ虚辞 there が v˷ の指定部には併合可能で、CAUSE や Voice の指定部には併合できないのかということも不明である。たとえ、CAUSE や Voice の指定部が他の要素ですでに占められていたとしても、さらに外側の指定部に併合することは可能なはずであり、Deal の分析を支持するのであれば、この点についても説明が必要な可能性もある。

3 ）藤田・松本（2005）では、（23）の Mary が Agent の解釈を受ける場合の派生として、v2と v1が先に併合され、v1-v2複合体が Mary に複合的な θ 役割を与えるという可能性も指摘されている。

4 ）Honda（2020）では、D1は接辞であるためラベル付け能力を持たない主要部であり、（27）全体のラベルはこのままでは決定できないため、ラベルを α と記載している。D2が D1に付加される場合は、全体のラベルは D1-D2 となる。また、D1が（27）から移動すれば、D1は α 内でラベル付けから見えなくなるため、（27）は D2P とラベル付けされる。本論文では、この詳細には触れず、単に α と記載しておく。

5 ）英語の場合、人称・性・数の一致が顕在化しないが、本論文では、Asp_{prog} と連結詞の間に性・数の素性共有があるのではないかと仮定しておく。性・数の一致が顕在的に現れる言語の中で、現在分詞と名詞が性・数の一致を示す例は見つけられなかったが、過去（受動）分詞と名詞が一致する例として以下のようなものがあることから、ここでは現在分詞も同様の一致があるものと仮定することに留めておく。

（ i ）As meninas foram vistas.
the girls were seen-FEM-PL
‘The girls were seen.’ （Hornstein et al. 2006: 87）

6）（50）の Affectum という名称そのものは適切でないかもしれないが、ここでは BECOME の項に該当し、変化の影響を受ける要素としておく。これは、既に存在する対象物が何らかの作用を受ける場合、被動目的語（affectum object）と呼ばれることに基づいている。一つの可能性として、結果目的語（effectum object）を取るような make や build はこの v3を含まず、その他の動詞は v3が含まれているという可能性も考えられる。また、出来事が生じる元としてこの項を捉えるのであれば、Affectum よりも例えば、Origin のような名称の方が適切かもしれないが、これについては今後の検討課題としたい。

7）ただし、この論文でインフォーマント調査を依頼した英語母語話者は（52 a）を容認できない文と判定した。

参考文献

Abe, Jun（2018）“How to Probe Expletives,” *Studia Linguistica* 72, 76-12.

Chomsky, Noam（2000）“Minimalist Inquiries: The Framework,” *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka, 89-155, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam（2001）“Derivation by Phase,” *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam（2013）“Problems of Projection,” *Lingua* 130, 33-49.

Chomsky, Noam（2015）“Problems of Projection: Extensions,” *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simona Matteini, 3-16, John Benjamins, Amsterdam.

Cruse, D. A.（1973）“Some Thoughts on Agentivity,” *Journal of Linguistics* 9, 11-23.

Deal, Amy Rose（2009）“The Origin and Content of Expletives: Evidence from ‘Selection’,” *Syntax* 12, 285-323.

Fujita, Koji（1994）“Middle, Ergative and Passive in English: A Minimalist Perspective,” *MIT Working Papers in Linguistics* 22, 71-90.

藤田耕司・松本マスミ（2005）『語彙範疇（Ⅰ）動詞』, 研究社 , 東京 .

Haegeman, Liliane（1991）*Introduction to Government and Binding Theory*, Blackwell, Oxford.

Honda, Takahiro（2020）“A Split Phi-Features Hypothesis and the Origin of the Expletive *There*,” *English Linguistics* 37, 1-33.

Hornstein, Norbert（1999）“Movement and Control,” *Linguistic Inquiry* 30, 69-96.

Hornstein, Norbert, Ana Maria Martins and Jairo Nunes（2006）“Infinitival Complements of Perception and Causative Verbs: A Case Study on Agreement and Intervention Effects in English and European Portuguese,” *University of Maryland Working Papers in Linguistics* 14, 81-110.

影山太郎（1996）『動詞意味論－言語と認知の接点－』，くろしお出版，東京.

Keyser, Samuel Jay and Thomas Roeper（1984）“On the Middle and Ergative Constructions in English,” *Linguistic Inquiry* 15, 381-416.

金水敏（1994）「連体修飾の『～タ』について」，田窪行則（編）『日本語の名詞修飾表現－言語学・日本語教育・機械翻訳の接点－』，29－65，くろしお出版，東京.

Levin, Beth（1993）*English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*, University of Chicago Press, Chicago.

Milsark, Gary L.（1974）*Existential Sentences in English*, Doctoral dissertation, MIT.

Postal, Paul M.（1974）*On Raising: One Rule of English Grammar and Its Theoretical Implications*, MIT Press, Cambridge, MA.

Postal, Paul M.（1993）“Some Defective Paradigms,” *Linguistic Inquiry* 24, 347-364.

Sabel, Joachim（2000）“Expletives as Features,” WCCFL 19, 411-424.

Sobin, Nicholas (2014) “Th/Ex, Agreement, and Case in Expletive Sentences,” *Syntax* 17, 385-416.

コーパス

British National Corpus (https://scnweb.japanknowledge.com/BNC2/)